

提携米通信

2021年8月号・黒瀬農舎

暑中お見舞い申し上げます。



ブナ救出作戦！ 2021.7.19撮影

下刈は、暑さと草いきれで山の超過酷作業。今年は、熊の出没や、雨がなく乾燥のお陰でヤマヒルもまばら。大助かりでした。

7月始めからの気温は、何処が酷暑になるかは、北も南も関係ないようで、当地・北国秋田も茹だるような暑さの日が続いています。

身体は大変ですが、このお陰で稲はとも元気に成長してくれています。

先月19日には、この過酷な暑さの中、秋に植えたブナの管理に山に向かいました。

ブナは、心配していた通り、雑草やツタに絡まれ、息も耐えだえ。

5年前に植えたブナは、中には3メー

ートルを超えている樹もありますが、その大きな樹であっても、先端がかろうじて見えるほどに雑草に覆われています。

昨年植えた小さなブナは、すべて草の中。2割ほどはすでに再生不能の窒息状態です。

「下刈作業」というよりも「ブナの救出作戦」という言葉がピッタリの有様。

できるなら、6月上旬に山に入れば最高なことは判っているのですが、私たちスタッフは、ほぼ全員が米作り農家。またその中の大半は、有機無農薬栽培を行っていますから、今の時期であっても、寸暇を惜しんで田んぼの草取りに没頭中。ましてや1ヶ月前の時期にブナに割く時間なんてとても無理なのです。

また、田圃仕事より、山は涼しく快適のように思う人が多いと思いますが、実はまったく逆。尾根に風があっても、下刈地は無風灼熱、草いきれでムンムンの実には過酷な作業です。

活動資金に年30万円ほど余裕あれば、山仕事をする地元の方に、我々が山に向かうまでの間の補助的作業をお願いでき、もっとブナを助けられるのですが、現状では無理な状態。

20人ほどのスタッフが、汗にまみれエンジン式草刈機を振り回した結果、急場はなんとか凌げたようで、後は、後日の管理に回しました。全員グッタリ！作業終わりにビールで乾杯！なんて元気は誰にも残ってなく、早々に解散の次第。

提携米 黒瀬農舎

〒010-0445

秋田県南秋田郡大湯村西1丁目4の7

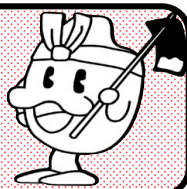
黒瀬 正・友基

TEL:0185-45-3088 FAX:45-2887

E-mail: akita@kurose.com Web:

提携米 黒瀬農舎

検索



★定期購入の場合も、変更や前倒しの出荷休止はいつでも対応いたします。変更や休止は次のお米のお届けの5日ほど前までにご連絡下さい。

★お米のご贈答利用も宜しくお願いします。

★電話は土日祝日も含めて朝8時～夜8時頃まで対応致します（自宅兼事務所）。但し、電話受付の専任スタッフはいないため田圃や倉庫作業、外出の時は留守番電話対応となります。ご了承願います。

また、メールもぜひご利用下さい。なおメールは原則すべて返信していますので、返信メールが届かない際は自動的に迷惑メールとなっている可能性があります。迷惑メールやメールの設定をご確認下さい。

オリンピックの年・今年のマガモ君はよく頑張りました。

今年は5月末から6月上旬は、気温がやや低めで推移したため、稲の活着が少し遅れました。

マガモの放鳥は、稲がしっかり根を下ろさないと、カモの活動で稲が傷むため、除草効果が劣ることを心配しつつ、放鳥を1週間遅らせました。



マガモも頑張り、稲は順調です

この写真では判り難いですが、放鳥後4週間で成鳥近くまで太りました。

2021.7.7撮影

でも、放鳥後に気温はグングン上り、そのお陰で、例年に増してカモの成長や活動は活発になり、心配は杞憂に終わりました。

恒温動物ですから、気温や水温が低いと、水から上がって、身体を暖める時間が増えますが、放鳥後は、気温が高く、休む時間が少なくなり、また、夜行性のため昼夜共に活動活発でした。

このように、植物の成長と同じで、気温が高いと成長や活動は促進されます。

孵化後10日ほど餌付けして、スズメより一回り大き目のマガモを放鳥しますが、1ヶ月で5、6倍に（鳩より一回り大き目）太り、成鳥に近い大きさになります。

有機無農薬栽培の雑草対策には、田植え時期から秋の収穫時まで延々と大苦勞しますが、雑草の発芽の99%は、田植えから約1ヶ月までの期間に限られており、その頃になるとマガモは、引き上げます。

その後に雑草が発生しない理由は、稲が成長すると、直射光線が土面に届かなくなります。水温気温をはじめ、植物の種の発芽3条件が揃っても、水田雑草は、直射光線が射さない、木漏れ日程度では、種は発芽しない特性を持っているようです。

従って、秋まで、草取り作業するのは、この時期に発生した雑草の取り残しの排除ということです。

ところで、カモの放鳥は、田んぼの周囲全部に逃走防止と害獣侵入防止のためのネットを張り巡らしたり、日々の給餌など手数がかかり面倒ですし、マガモ君だけで雑草がなくなるわけでもありませんが、高齢化で草取りのパートさんが少なくなったため、仕方なくマガモ君の参加も要請する次第です。

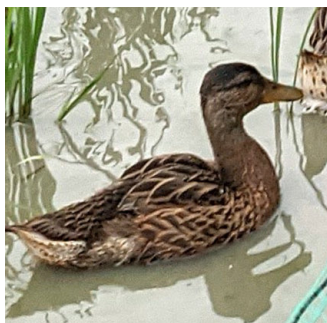
最初の数年は、消費者の方が我がロッジに1ヶ月宿泊してマガモ管理の応援を頂いたり、マガモを襲う害獣、カラスなどと闘うため、猟銃免許を取得するなど苦勞していましたが、何年も続けていると、管理のノウハウが蓄積され、放鳥に投入するエネルギーは当初に比べると数分の一に減りました。

しかし、放鳥効果は、その年の天候に大きく左右され、効果抜群の年もあれば、ほとんど効果が見られず「カモにカモにされた年」もあります。でも、それもまた愉しみです。

「マガモと合鴨」

水稲の有機栽培で一番の難問は、雑草対策です。

希に「俺の雑草対策は完璧だ!」という有機名人と自認する生産者がおられますが、それは嘘です。トランプさんを超越するサイコパスを患っている方の誇張です。稲作伝来の太古から、半世紀前に除草剤が開発普及するまで、日本の米作りは、雑草との闘いだったのですから、そんな方法は皆無です。



よって、幾つもの雑草抑制や除草方法を組み合わせて、俊いでいくしかありません。その抑制方法の一つが鴨の放鳥です。

この場合に使われている鴨のほとんどは「合鴨」です。アヒルとマガモを交配した鴨ですから「合鴨」と呼ばれています。

野生種のマガモを飼育して、自家採卵、孵化させ除草に使う農家が、新潟に数人いらっしゃるようですが、マガモのヒナを頒布しているのは、我が農舎がお世話になっている、山形県船形町の庄司さんが日本唯一のようです。

我が農舎に応援に来てくれるこのマガモ君は、合鴨に比べ、やや小型で、活動が活発なのが特徴。

今年のマガモ君、先月中頃過ぎに、故郷の船形町に帰りました。ここで冬まで育てられ、その一部は鴨鍋用に某居酒屋さんに出荷され、夏は秋田で、冬は首都圏で、人間のお役に立つようですが、コロナ禍でどうなるのか。